

英字新聞を使った授業：サッカー・ワールド・カップ（FIFA World Cup）の記事を中心として

岩 本 典 子

This paper shows how English-language newspapers can be used as “authentic materials” to teach newspaper English as a part of classroom activities. For the principal area of investigation, data drawn from FIFA World Cup 2014 will be employed; for the secondary area, data from Sochi Winter Olympics 2014 and other sources will be used. The main portion of the paper will be devoted to clarifying the register of newspaper English in sports articles, explaining the particular use of wording, rhyme, humor, metaphor, allusion, polysemy, and various abundant expressions in reference to the same proper nouns (athletes or groups) or verbs (what the athletes did). The rest of the paper examines the rhetoric of newspaper articles from the perspectives of conceptual (cognitive) metaphor, focusing mainly on orientational metaphor. Orientational metaphor is a metaphor in which concepts are related to each other in terms of spatial terms, as encoded in language (e.g. up—down, front—back). The paper concludes that various elaborate or poetic expressions and rhetorical devices are adopted in English-language newspapers to draw readers’ attention. What the students will learn through these studies will, hopefully, form the basis for better understanding of newspaper articles in other areas such as economics, politics, social issues, and arts, and also a better understanding of colloquial English expressions.

キーワード：押韻 (rhyme), 比喩表現／メタファー／隠喩 (metaphor), 引喩 (allusion), 多義性 (polysemy, ambiguity)

ty), 概念メタファー (conceptual metaphor/cognitive metaphor)

1. はじめに

文部科学省による学習指導要領の英語教育に関する目標は、「英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、実践的コミュニケーション能力を養う」というものである。その中でも「時事英語」は、高等英語専門教育における1つの選択科目とされている。「時事英語に関する基礎的な能力と知識を習得させるようにする」ことがその目指すところであり、中でも、「新聞や雑誌等の読み取り」は、「テレビやラジオ等の放送の聞き取り」や「情報通信ネットワークを通じた情報の理解」等と共に、その内容の1つとなっている（文部科学省 1999）。

英字新聞はなにより、“authentic material”であり（国際英語プロジェクト 2002：81）、いわば時事英語の宝庫であるといえる。私たちの社会生活や日常生活を、英語によって、的確にかつ豊かに反映したもので、昨今の社会や世の中の情勢を知りつつ、英語を学べるという良さを持っている。但し、英字新聞には独特の構造に加え、特有の英文法、語法、構文等の文体（いわゆるレジスター、言語使用域 register）がある。英字新聞全体に、あてはまるものもあれば、政治、経済、社会問題、芸能、スポーツ等、各ジャンルによって特有であったり、分野によって、使用頻度の高くなる語彙や言いまわし、フレーズ、構文等もある。また、読者の関心を引き付けるため、宣伝広告や、詩作等のように、英字新聞においても、魅力的な比喩表現（metaphor）を使ったり、押韻を用いたり、同じ意味のことを様々な表現で、いい換えたり、多義語やことば遊び等の、ユーモアも取り込んで、上手く技巧が凝らされ、詩的機能が作用していることがよく見受けられる。

本稿では、2014年6月から7月にかけて、ブラジルで行われたサッカー・ワールド・カップ（FIFA World Cup 2014）、及び、付属的に、2014年2月にロシアで行われたソチ・冬季オリンピック大会（Sochi Winter Olympics 2014）に関する英字新聞記事を中心としたスポーツ記事を扱う。英字新聞のデータとして、*The Japan Times*, *The Japan News by The Yomiuri Shimbun*（以降、*The Japan News* と表記する）、*The Wall Street Journal* 等からの記事を使用する。実際に、FIFA World Cupが行

われたその時期（2014年6月から7月）に、英語の授業で、教材の一部として使用したもの、及び、そこで用いた指導法や、解説した内容の一部を、本稿では紹介したい。受講者たちは、FIFA World Cupに関心のある者が多く、前もっての知識（背景知識）があるため、なにより入りやすいものであった。アンケートによると、受講者の多くは、スポーツ記事とて、ただ経過と結果を淡々と伝えるにとどまるものではなく、その見出しを始めとして、様々な文体的技巧が凝らされていて、豊かで深みのある表現が随所に見られるということが理解できたようである。このように英字新聞を使うことで、英語の関連語彙増強等にとどまらず、英語におけるユーモアや表現等も、楽しみながら学ぶことができる。時事英語学習導入の当初から、政治や経済の英文記事から入るのは、やや難しいので、ゆくゆくはチャレンジしたい、比較的難度の高いこういった記事への導入としても、スポーツ記事等はふさわしいものである。

本稿の第2項～第7項では、主に一般英語の学習者を対象とした、新聞英語の指導法を紹介している。英字新聞におけるレジスター（言語使用域 register）（独特の語法、構文、文法、押韻、多義語、比喩表現等）について、サッカーの記事から主として引用し、順に述べることにする。第8項～第9項では、認知言語学（cognitive linguistics）における概念メタファー（conceptual metaphor／cognitive metaphor）の視点から、サッカーの記事の分析を試みる。この学問的立場においては、比喩表現、ないしメタファー（metaphor）は、単に文学及び、文体上の装飾ではなく、人の基本的な認知方式に関係するものとされている。これにより、さらに、新聞英語及び、口語英語を始めとした英語表現一般への理解も深まることも期待される。こうして、英字新聞は、時事問題を楽しく学習しつつ、一般英語から言語学まで、幅広く教材として使用できるものであることをも論じたいと思う。

2. 見出しの語法について

新聞記事の構成は、より重要な情報／内容が先に記述されるように配列されている。英字新聞は、見出し（headline）、書き出し（lead）、本文（body）の3要素から構成されており、この順で上から並んでいる。見出し（headline）は記事全体の冒頭に位置し、記事の内容を簡潔な表現で、まとめたものである。通常1行で、大きな字体で書かれている。書き出し

(lead) は、記事の全体を要約するものである。本文 (body) そのものも、より重要な内容が先に置かれる構成となっている。見出しは、限られたスペースの中で、生き生きとしたイメージを与え、読者の関心や注意を引き付けるために、独特の語法や文法が使われている。見出しにおける特徴的な語法や文体を、以下に例と共にまとめる。

- (1) 見出しは、できるだけ簡潔で、読者の好奇心を引き付けるものでなければならないので、日常的に使われ、短く具体的なイメージのある語が用いられる。

OK (admit), rap (criticize), eye (watch carefully), tap (appoint),
foil (defeat, prevent someone or something from being successful)
(いずれも動詞として使う例)

- (2) 頭文字 (略語) の使用

UN (United Nations), PM (Prime Minister), SDF (Self Defense Force)

- (3) 短縮語の使用

S. Korea (South Korea), Govt (Government)

- (4) コンマの用法

- (a) “and” の省略として用いる。例：U.S., Japan (U.S. and Japan)
(b) 補足情報の前後に用いる。例：Taro Yamada, a 21-year-old
Yokohama resident
(c) 情報の後に、情報源を示す句が来る場合、両者の区切りとして用いる。

Japan must face war past, S. Korea tells visiting Governor

- (5) 冠詞・代名詞の所有格の省略 (指示するものが明らかな場合)

- (a) Dog bites woman, son → 本文では、bitesは過去形のbitとなり、省略語を補って、

[A] dog bit [a] woman [and her] sonとなる。

- (b) 上記 4 (c) の例で省略語を補うと、Japan must face [its] war past, S. Korea tells [the] visiting Governorとなる。

- (6) コロンで発言者や情報筋を表す

コロン (:) はこの場合、“say(s)” と同じ機能を果たす。発言内容はコロンの前でも後でも良い。“Poll:~”で、「世論調査によると~」、
“Survey:~”で、「調査によると~」の意味である。

Human space program enriches our life: Astronaut

(*The Japan News*, 2014年 8月 6日)

Poll: Americans want to treat migrant children as refugees

(*Newsweek* 2014年 7月29日)¹

(7) 未来を不定詞で

PM to visit UK (Prime Minister is going to visit United Kingdom)

(8) 過去・現在完了を動詞の現在形で

見出しでは、読み手に臨場感を与えるため、最近の出来事には現在形が使われる。

この用法は、historical present tense といわれる。

Germany grabs title, denies Messi

(*The Japan News*, 2014年 7月15日)

上の例における動詞の時制は、本文ならば、Germany grabbed title, and denied Messi となる。但し、発言を引用した部分や、歴史的な事実の記述等には過去形が使われる。

U.S. troops 'advised' to steer clear of Yasukuni

(*The Japan Times*, 2014年 8月18日)

Emperor desired end to the war

(*The Japan News*, 2014年 9月15日)

昭和天皇が1941年10月の時点で、「戦争の終結」を望んでいた旨を伝える記事。

(9) be動詞の省略

Ten killed in train accident → 本文では、Ten [people were] killed in [a] train accident というように、be動詞のwere（及び、peopleと、a trainの、trainにかかるa）が省略されている。本文では、省略語が補われる。

Obama elected US President（本文では、Obama [was] elected US President）

(10) 現在分詞は進行形を表す（be動詞は省略される）

Typhoon approaching Honshuu（本文では、[A] typhoon [is] approaching Honshuu）

(11) 短い副詞の活用

Foreign Minister back from S. America（本文ならば“[is] back”と、

isを入れる)

Exports down 5 % in July (本文ならばdecreased等の動詞, またはwent down等の句動詞を使う)

(cf. 以上 Kizuka & Gagne 2002; Kamimoto 2010)

3. 見出しにおける押韻と詩的機能について

上述したいくつかの語法や文法事項に加えて, 英字新聞の見出しには, 読者の注意を引き付けるため, 広告, 詩作, 歌詞等におけるように, 韻(rhyme)を踏んで, リズム感を持たせているものが見受けられる。いわゆる押韻のことで, これは詩的な機能の一旦である。英字新聞の見出しには, 短い中にも詩的機能(poetic function)を有するものが多々存在するのである。詩的機能とは, Jacobson (1960)によると, 意味のみではなく, 言語メッセージの形式や, メッセージの構成要素の配列そのものへの関心を, 喚起する機能のことをいう。なによりJacobsonは詩的機能の作用する範囲を, 詩歌だけに限定せず, あらゆる言語活動や, さらにそれを越えた非言語的な活動にも, 及ぶものとしている(Jacobson 1960: 350-351)。例えば, 詩的機能が優勢的に全体を流れている言語の分野として, 詩歌の他にもことわざや, 宣伝キャッチフレーズ, 政治スローガン等のカテゴリーがある。「局部的には成句(kith and kin, last but not leastなど)や何気ない言いまわしにも詩的機能の働きが観察される」(池上 1987: 184)といわれている。このような働きにおいては, メッセージの意味内容のみならず, 押韻(説明は後述)を伴う用語の配列ぶりに卓越性が認められる。新聞の見出しにも, それに該当する例がよく見られるのである。

詩的機能というものを本研究に関連させて, まとめるならば, すなわち, 言語表現それ自体を, 遊戯とする働きのことであって, ことは遊び(言語遊戯)は, その典型例であるといえる。これは, 言語の発音や意味を活用した遊びのことである。押韻(rhyme)は, 音を利用したことは遊びにおいては根幹的なもので, 音をそろえることでメッセージに一定のリズムを持たせ, 楽しみつつ詩的機能を具現するものである。語の頭をそろえるものを, 頭韻(alliteration)といい, 語の最後の音をそろえるものを脚韻(rhyme)という。押韻といえば脚韻(同じrhymeという用語である)というくらいに, 脚韻の方が多くとされている(例: wild and mild, match to watch)。新聞の見出しはあたかも詩の一形式であるがごとくに, 押韻

の諸例が、しばしば見られるのである。なお、Jacobsonは、等価性を保つために、おおよそ同じものを、同じとする詩的許容性も説いている。例えば、押韻において、似通った音を、ほぼ同じものとして扱うことができるのである。押韻がよく利用される技巧として、比喩法に引喩 (allusion) といい、似たような音や、伝えたい意味を持つ慣用句、成句、用語、歌詞、故事、ことわざ、人のことば等から、引用してくる技巧がある。これにより、いいたいことを間接的に、また簡潔に表現することが可能となる。引喩はその音声を似せて口調全体が似通っているものの、時に元のものをもじって、意味の異なる面白みのある句を作ったりする言語遊戯である。ここでは、同音意義語 (例：reignとrain, 下記(4)参照) や、似た音のことばにかけていう場合が多々見られる。また、第7項で述べるように、ことばの多義性 (意味の面) を基にしたことば遊びもあるが、本項では主に音を基にしたものを扱う。

以下、(1)～(4)に、ことば遊びの例をあげる。それぞれに押韻があり、頭韻と脚韻に分けて記述する。押韻が見られる語には、下線を付してある。(1)、(3)、(4)には、引喩 (allusion) の技巧も織り込まれている。

頭韻を踏んでいる例

(1) Double Dutch

(*The Japan News*, 2014年7月1日)

FIFA 2014の決勝トーナメント16強戦における、対メキシコ戦で、オランダが2人の選手によって、2点を入れて勝利した旨を伝える見出しである。オランダ等が発祥とされ昨今流行である縄跳びDouble Dutch (ダブル・ダッチ)² からの引喩でもあるが、さらには、第7項(1)を参照されたい。Double とDutch が同じ【dʌ】の音で始まる頭韻現象を有しており、パンチのきいた見出しとなっている。

(2) Japan, S. Korea 'coordinated' Kono wording

「日本と韓国は河野談話に関して調整をはかった」

(*The Japan News*, 2014年6月21日)

中間に並んだ3語が頭韻を踏んでいて、リズム感を持たせている。

脚韻を踏んでいる例

(3) Man assigned to Messi calm before the storm

(*The Japan News*, 2014年7月12日)

FIFA2014決勝戦であるドイツーアルゼンチン戦を控えて、メッシ選手のマークを任されることになったベネディクト・ヘーヴェデス (Benedikt Hoewedes) 選手は、「嵐 (大試合) の前も、冷静沈着で落ち着いている」という意味である。“Calm” と “storm” が脚韻を踏んでいる。慣用句 “the calm before the storm” 「嵐の前の静けさ」からの引喩である。そもそも慣用句では、“the calm” は「嵐」という名詞で使われているが、ここでは、“calm” を「冷静沈着、落ち着いた」という、人の精神状態を表す形容詞として使っている。

(4) World Cup: The Reign of Spain Ends in Pain

(*The Wall Street Journal*, 2014年6月18日)³

前回優勝国 (the defending World Cup champion) であるスペインが、チリに負けた時の見出しで「スペインの統治は、痛ましくも終了」という意味である。この見出しでは、4語が見事に脚韻 (ないし、それに近い音) を踏んでいる。ミュージカル “My Fair Lady” 中の歌にある “The rain in Spain stays mainly on the plain” からの引喩に基づいたことば遊びで、“rain” は “reign” と同音意義語であり、“plain” と “pain” は、同じ子音 p で始まる頭韻現象を持つのに加えて、脚韻も踏んでいる。なお “The Reign of Spain” (スペインの統治) は、かつてのスペイン帝国時代をほうふつとさせる、脚韻を伴った引喩である。

関連項目である「見出しに見られる、多義性を用いたことば遊び、及び、比喩表現」については、第7項を参照のこと。

4. 同じ語・表現の繰り返しを避け、表現にバリエーションを持たせる

見出しにおける主な文体の特徴は、以上述べた通りである。書き出しや本文にも、特定の語法や文法等を伴う文体的特徴がいくつか観察されるが、本稿では特に表現のバリエーションと、群形容詞、及び、口語表現の使用について述べる。

英語という言語には、同じ意味の語や表現を繰り返して使うことを、避

ける傾向がある。この傾向は日本語の場合よりも強く表れる。このため英文では、同じ名詞、動詞、形容詞、副詞、等々の使用を避け、代名詞（名詞の場合）や、代動詞（動詞の場合）を用いたり、類語を使って表現する。こうして修辞上、バリエーションを増やすのである。もちろん文章や話の流れから、特に固有名詞等、再度明確にした方が良い場合は、繰り返すことになる。英字新聞や、英文雑誌の記事等では、1つの表現が、実に様々な表現に置き換えられている。⁴

サッカー日本代表チームを言及する際にも、常に “Japan,” “the Japanese team” という同じ呼称ではなく、様々な表現が用いられている。FIFA World Cup 2014においても、以下のような表現で言及されていた。(Alberto Zaccheroniは、大会当時の日本代表チームの監督である。)

- (1) the Samurai Blue; the national team; Alberto Zaccheroni's men; Zaccheroni's side; the Asian champions; the Japanese players; Nippon

(*The Japan Times*, 2014年6月16日, 26日)

読解の際に、英文記事は同じ意味を伝達するにも、全く同じ語を極力使わないようにしているということを、学習者に伝えておくことは大切である。そのような指示がないと、学習者は、“Alberto Zaccheroni's men” という表現が、なぜでてくるのか、ディスコースにおける技巧性が、十分に理解できないままに、ただ機械的に「アルベルト・ザッケーロニの率いる選手たち」と訳すことになるからである。

各選手を言及する際にも、単に「～選手」という選手名にとどまらず、その選手の所属や、プレーにおける特徴やポジション、年齢や容姿容貌等に基づいて、様々な表現が使われている。チーム名についても、例えば、Manchester Unitedのことを、“the English Giants”(*The Daily Yomiuri*,⁵ 2012年6月10日)と、AC Milanを、“the Italian Giants”(*The Japan News*, 2014年9月2日)と表現している。(種々の名称は群形容詞で表されることも多いので、第5項も参照のこと。) 以下は諸例である。

・本田圭佑選手に関する表記：

- (2) a. the bleach-blond Honda, The CSKA Moscow dangerman dazzled with a hat-trick against 10-man Jordan… (なお, bleach

と blond, 及び, dangerman と dazzled が頭韻を踏んでいる)

(*The Daily Yomiuri*, 2012年 6月10日)

b. AC Milan midfielder Keisuke Honda

(*The Japan Times*, 2014年 6月16日)

・ 香川真司選手に関する表記

- (3) new Manchester United recruit Shinji Kagawa;
the attack-minded midfielder

(*The Daily Yomiuri*, 2012年 6月10日)

・ ディディエ・ドログバ (Didier Drogba) 選手に関する表記：

- (4) Cote d'Ivoire star striker Didier Drogba (star と striker が頭韻を踏んでいる); talismanic (不思議な力のある) striker Didier Drogba

(*The Japan Times*, 2014年 6月16日)

・ ギジェルモ・オチョア (Guillermo Ochoa) 選手に関する表記：

- (5) a. He was called a hero and a savior by his Mexican teammates;
that Mexico goalkeeper Guillermo Ochoa; the 28-year-old
keeper

(*The Japan News*, 2014年 6月19日)

- b. Voted man of the match (優秀選手); the 28-year-old keeper;
the curly-haired Mexican keeper; the star player

(*The Japan News*, 2014年 7月 1日)

動詞についても同様のことがいえる。次の記事は、2014年 2月のソチ・冬季オリンピック大会で、日本がジャンプ団体戦で、銅メダルを獲得した時のものである。メダルを「獲得した」という同じ意味を表すにも、“win a medal” という表現に限らずに、微妙なニュアンスの違いをくんで、種々の類似表現が使われている。

- (6) 41-year-old Noriaki Kasai, a seven-time Olympian, earned his second medal of the Sochi Games; Japan captured the bronze medal in the large hill team jump; The quartet...combined to bring Japan its first medal in the event since winning the gold at the 1998 Nagano Games; Germany claimed the gold; Austria took

the silver; Japan finished … to clinch its sixth medal of the Sochi Games.

(*The Japan Times*, 2014年2月19日)

特に“capture,” “clinch”には、単に neutralな“took”では表せつくせない、紆余曲折を経て、ようやくメダルを「つかんだ」という選手らの思いが込められている。金メダルを獲得できたドイツには、「求めて獲得した」という語感を持つ“claimed”が使われているが、オリンピック&世界選手権において、9連勝を目指し、成し得なかったオーストリアには淡々と、“took”が用いられ、喜びを表す語感はない。このtookの用法は、“they took a pay cut”(彼らは減給を受け入れた)におけるtookのように、「あまり満足していない気持ちで受け入れた」という語感に似ている。

英文を読む際に、このような視点で読むと、類語や類似表現の豊富さに興味が行き、楽しみつつ語彙増強にも取り組めるのである。「～選手を表す表現を探す」とか、「メダルを獲得する、にあたる動詞を見つける」というように、学習者に語彙・表現リストを作らせてみるのも、語彙感覚を高めるのに良いactivityである。一般に、日本の英語学習者が英作文をする際には、表現にバリエーションを持たせるように、心がけると良いであろう。

5. 群形容詞の使用

群形容詞とは、語群をハイフンでつないだ形容詞のことで、英字新聞の書き出し(lead)や本文(body)の部分で、よく使われる語法である。これにより、当該事項の説明を、関係詞節(例: which…, who…)や、代名詞を伴う別の文(例: It…, They…)で、節や文を増やすことなく、簡潔で引き締まった文体で表現することができる。また群形容詞は、主に内容語(content words)が、ハイフンで結ばれているものなので、視覚的にも早くとらえられる。さらに、造語性があるので、新しいことがらや概念も、限られたスペースで、簡潔に記述しやすい構成になっている。以下は諸例である。

- (1) The leaders of the countries initiated a 3-day talk on Monday.
- (2) The activists are participating in anti-nuclear campaign.
- (3) The forces will be sent to aid the disaster-stricken / ebola-hit areas.

スポーツ記事においても、様々な群形容詞が多用されている。

- (4) Messi's record-breaking brilliance (これまでの記録を破るようなメッシ選手の卓越性) over the last six seasons at Camp Nou cannot be understated…; One-man show (マラドーナ選手の、かつての活躍ぶりを「一人舞台」に例えたもの); a 17-year-old Pele in 1958

(*The Japan News*, 2014年7月13日)

- (5) The Netherlands winger (Robben) earned an injury-time penalty (延長戦でのPK) Sunday and then watched a teammate Klaas Jan Huntelaar converted [*sic*] from the spot to give the Dutch a come-from-behind (逆転勝利) 2-1 victory over Mexico in the second round of the World Cup… (Robben) … providing an inch-perfect assist (インチの単位まで完璧なアシスト) for a Memphis Depay goal…

(*The Japan News*, 2014年7月1日)

- (6) Neymar almost got his revenge before the game ended, sending in a free kick to Brazil captain Thiago Silva, whose close-range header (近距離ヘディング) was somehow stopped by the curly-haired Mexican keeper (カーリーヘヤーのメキシコ人キーパー, オチョア選手のこと).

(*The Japan News*, 2014年7月1日 前掲)

- (7) 41-year-old Noriaki Kasai, a seven-time Olympian (7度目のオリンピック出場者である41歳の葛西紀明選手)

(*The Japan Times*, 2014年2月19日 前掲)

6. 口語表現の学習となる

英字新聞は、出来事を紹介した後に、当事者たちのインタビューが載せられているので、その箇所は口語表現の学習になる。インタビューの内容は、間接話法で書かれているか、直接話法で引用符に入って示されている。(英語以外で話されたことがらは、口語的な英語に訳されている。) そのため、まさに「今」起こっていることがらについて、当事者たちが、意見や感想等を含めて、どう語っているのか、旬の口語表現で知ることができる。例えば、試合に勝った時の、“I feel great”(日本代表チーム、ザッケロー

ニ監督の、ワールド・カップ・アジア最終予選、対ヨルダン戦でのことば) (*The Daily Yomiuri*, 2012年6月10日)や, “I’m happy, I saw a good spirit”(イタリアAC Milanのインザーギ監督の、イタリア・セリエA、対Lazio戦でのことば) (*The Japan News*, 2014年9月2日), 逆に負けた時の “It’s a huge disappointment”(FIFA 2014にて、コロンビアに1 - 4で敗退した際の日本チーム・ファンのことば) (*The Japan Times*, 2014年6月26日)等は、感情を表すための口語的で生きた表現である。次の(1)には、FIFA 2014のベスト16戦での、対メキシコ戦において、終了間際になってゴールを決め、ようやくオランダを勝利に導いたオランダ選手や監督のことばが、引用されている(第7項(1)も参照のこと)。

- (1) “Unbelievable,” said Arjen Robben, the Netherlands forward that earned the late penalty. “Five minutes from full time, we were out.” … “The humidity was against us, but we were fresher and fitter than the Mexicans,” Van Gaal said…Huntelaar, … [said,] … “And it was fantastic.”

(*The Japan News*, 2014年7月1日)

次の(2)は、日本がコートジボワール戦で負けた時の、ファンのコメントを引用している。

- (2) Masaya Matsuoka, 22, of Kanagawa Prefecture, said it was fun to watch a match in public for the first time with other fans, even if Japan lost. He said Japan didn’t create enough chances to score. While others praised Honda for scoring first, they also said the team didn’t look good overall… “Today’s match was disappointing, but I want to believe that if Japan wins the next two games, we can advance.”

(*The Japan Times*, 2014年6月16日)

上記の引用にある、物事への反応を表す “unbelievable,” “fantastic,” “fun,” “disappointing” という語彙等,⁶ 使う状況を学びながら学習することができる。“We were out [of the game]” における副詞outの用法も, “The humidity was against us”(湿度は私たちオランダ・チームにとって不利で

あった)における, 前置詞againstの用法も, 口語的である。“We were fresher and fitter than the Mexicans”(私たちは, メキシコ選手たちよりも, はつらつとしていて, 元気いっぱいであった)における比較級“fresher and fitter”の用法も, 学校文法で習う比較級の文例よりも, 口語的なものである。

これらの口語表現を, 学習者が, comprehension (理解) からconsolidation (自分のものとして固めること), production (発表) へと, 段階を追って学ぶことができるように, インタビューを作成させて, 声を出して練習できるように指導する。手順としては, 授業で教材として使った英字新聞や関連語彙リスト等を参考にして, 学習者は自分の想像力も使いながら, “How was the game to you?”等の質問で始めて, 自由にインタビューを作成する。上の記事は, オランダ・チームを題材としたものであるが, もちろんそれに限らず, 日本チームでも好きな他国のチームでも, また好きな選手や監督でも, あるいはファンでも題材にして良いであろう。でき上がったらペアを作り, role play (インタビュワーと, 選手/監督/ファン役) に基づいて, 英語で疑似インタビューを行うのである。

7. 見出しに見られる, 多義性を用いたことば遊び, 及び, 比喩表現

英字新聞における見出し (headline) には, 英語特有の多義性 (polysemyまたはambiguityともいう) に基づいたことば遊びや比喩表現が, 使われることも多い。見出しはたとえ短くとも, 詩的な機能の一旦が, 時折垣間見えるのである (第3項参照)。多義語 (polysemic wordまたは polysemous wordという) とは, 意味論における項目で, 1つの語が複数の意味を持っていることをいう。句や文に関していうこともある。それらは特に, スポーツやアート等のエンターテインメント関連の記事でよく見られる。FIFA World Cup 2014 の記事でも, 多義語が使用され, 意味の複合性や重層性が, かもしだされていた。第3項では, ことば遊びを通した新聞の見出しの詩的構築について, もっぱら音 (押韻) の面から述べたが, 本項で見ると, ことば遊びは意味によるもの, ないし音と意味の双方による場合もある。多義語等によって具現される「意味の重なり」, ないし「意味の密度の高さ」というものも, ことばの詩的な働きの一旦なのである (池上 2003: 186-187; Wales 1989: 359)。Jacobson (1960: 371) もEmpson (1955) を引用して, 「意味の多様性という技巧は, まさに詩

の根源である」と述べている。

なお、意味の重なり（多義語）には、字義通り具体的な意味において、多義を持つ場合もあれば、具体的な意味と抽象的な意味の両方を持つ場合もある。そして、抽象的な意味の中には、比喩性を持つものも多い。比喩（メタファー metaphor）も詩的な機能の重要な一要素である。そもそも「比喩」を表すメタファー（metaphor）の語源は、ギリシャ語の“meta-”（～を越えて），“-phorein”（運ぶ）にあるため、metaphorで、「別の場所への移行」を意味する。すなわち、XとYになんらかの共通項がある場合に、Xは転移された（transferred）意味Yで使われる場合をいう。比喩表現には様々なタイプが存在する。いくつか例をあげると、直喩（simile）、隠喩（metaphor）、引喩（allusion）等である。直喩は、「～のような」（like～, as～）等の語を用いて、2つの事物を直接的に比較して表すものである。これに対して、隠喩は、「～のような」等の語を用いず、ある事物の特徴を、直接、他の物で表現する比喩法である。例えば、Life is a journey ということわざは、旅に見られる、「苦楽を含んだ紆余曲折」を人生にも見出し、その意味が転移された隠喩である。引喩（allusion）については、押韻の箇所（第3項）で前述している。なお、比喩を表す英語のmetaphorには、比喩表現一般をいう場合と、特に隠喩のことを指す場合とがある。また、比喩表現には、詩作や小説等における意外性のある転移を伴うものから、日常的に、あまり意識されることもなく、使われているものまである。つまり、明らかにXをYに例えていることがわかる比喩もあれば、一見、比喩性が潜んでいることがわからない、例えば、認知言語学における概念メタファー（conceptual metaphor）といった比喩形式もある（第8項参照）。まず本項では、比較的比喩性がわかりやすい諸例を紹介し、次項にて認知メタファーの観点から分析を行うこととする。

(1) Double Dutch: Late goal, penalty foil Mexico

(*The Japan News*, 2014年7月1日)

FIFA World Cup 2014の決勝トーナメント16強戦における、オランダ対メキシコの一戦を伝える見出しである（第3項、及び、第6項にて前述）。オランダが先制されながらも、土壇場で追いついて逆転し、2-1で勝利した試合である。終了間際の後半43分、スナイデル選手が同点に追いつかせ、試合終了間際の後半49分には、ロッベン選手が敵陣ペナルティーエリ

ア内で相手のファウルを誘い、得たPKをフンテラール選手が決めた試合である。“Double Dutch”(ダブル・ダッチ)は、同じ【dΛ】の音で始まり頭韻を踏みつつ(第3項を参照)、「2人のオランダ人」という意味と、彼らがそれぞれ、「終了間際の時間」と、「PK戦」において1点ずつ、合計「2点」を入れ、メキシコを破ったという複数の意味が込められている。さらに、プレーにおける選手たちのポジションを視覚的イメージからとらえても、縄跳びのダブル・ダッチ(オランダ等が発祥とされる)に、例えられていると考えられる。なぜならば、1点目のゴールに至る過程で、ロッペン選手がフンテラール選手に、パスを送った際のボールの動線(path)が、ダブル・ダッチにおける縄の動きに似ているのに加え、その間にいる選手たち(jumpersに例えられる)のポジションが、ダブル・ダッチのポジションによく似ているためである(図1参照)。よって、見出しには、「2人のオランダ選手がダブル・ダッチのような良いコンビネーションで、2点を決めた」というユーモアあふれる重層的意味合いが、込められているのである。すなわち“Double Dutch”は、頭韻、及び、視覚的イメージを含んだ複数の意味による、密度の高いことば遊びとなっている。

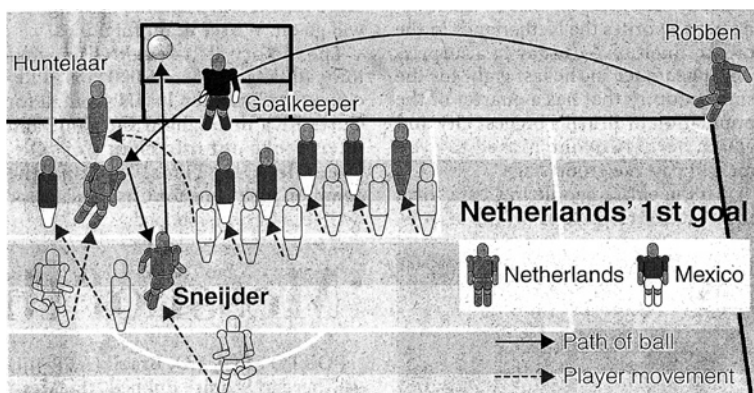


図1 最初のオランダ・ゴールにおける選手たちとボールの動線

(The Japan News, 2014年7月1日)

(2) Ochoa stands out for valiant Mexico

(The Japan News, 2014年7月1日)

メキシコのゴール・キーパーであるギジェルモ・オチョア選手は、今大会でブラジルのネイマール選手や、オランダのロbben選手という名ストライカーのシュートを止めたことで、一躍脚光を浴びた。メキシコが準々決勝まで進めたのは、オチョア選手の活躍によるところが大きいといわれている（第4項(5)a, b 参照）。そのオチョア選手の活躍ぶりをたたえる見出しである。“Stand out”は、「立ちはだかる、目立つ、他が屈しても自分は屈しない、（軍事用語で）一歩前にでる」という多義の意味を持つ句動詞である。そして、このコンテキストでは、いずれの意味も当てはめることができる。新聞には、16強の対オランダ戦で、ゴール前に立ちはだかって、オランダのフンテラール選手のシュートを止めるオチョア選手の写真が掲載されている（図2参照）。字義通り「オチョア選手、メキシコの勇士として、一歩前に出て立ちはだかる」という物理的な意味が考えられるが、「オチョア選手の能力は、勇敢なメキシコ・チームにおいても卓越している」といったやや抽象的な意味も込められている。すなわち、成句的な意味と、物理的・視覚的イメージ、そして、やや抽象的な意味合いをも織り込んだ、複合性のある見出しとなっているのである。



図2 メキシコのゴールキーパー、オチョア選手の活躍を伝える記事
(The Japan News, 2014年7月1日)

(3) Report: Aguirre to succeed Zaccheroni

(The Japan News, 2014年7月1日)

日本代表チームの監督交代についての記事で、「報告によると、ザッケローニ監督の後任を、アギーレ氏が引き継ぐ（replace）予定である」という

意味である。今大会で退任する監督の頭文字であるZと、今度新しく着任する監督の頭文字のAで、“A to Z”(初めAから終わりZまで)、“succeed”(「続く」followの意味)という表現が埋め込まれ、いわゆる引喩を用いた、ことば遊びとなっているのである。“A to Z”は、英語の慣用表現であり、「何から何までも」を意味する。(例えば、“Cooking A to Z”という本のタイトルならば、「クッキングの全て」となる。) よって、「何から何まで、ザッケローニ監督から、アギーレ氏が引き継ぐ (take over)」という意味にも読み取れる。日本語では、「1 から10まで、報告する／教える」というが、このようなところにも、文化により表現の違いがあることが教示できる。聖書に神のことばで、「私はアルファ (すなわちA) であり、オメガ (すなわちZ) である」とあるように、文化的・歴史的にも英語に根差した表現である。

(4) Germany glitters as “jewel” strikes

(*The Japan News*, 2014年7月15日)

ドイツが優勝した時の記事の見出しである。『『ドイツの至宝』(ゲッツェ選手 Mario Götze のこと) がストライクを決め (kicked and made a shot), ドイツはきらきらと (宝石のように) 輝く』という意味である。“Jewel” と “glitter” は、同じ見出しの中でも、別の節で使われているが、「宝石が輝く」という含意でつながる関連語 (collocation) である。“Germany” と “glitter” は、いずれも “g” で始まっている。“Jewel” はこのコンテキストで、多義語として用いられており、それに伴い、glittersは3つの事項にかかり、それぞれ意味を作りだしている。1つの意味は、「ドイツの国の威信が輝く」というもので、国を1つの輝く存在物 (entity) と、比喩化して (metaphorically) 抽象的にとらえている (“glitters” に三人称単数のsがついていることからわかる)。2つ目は、ゴールを決めたゲッツェ選手のことを、隠喩で「ドイツの至宝」(the “jewel of Germany”) と呼んでたたえ、「その功績が光る」という抽象的な意味合いをだすものである。なお、Götzeという選手名のドイツ語には、“tin god”(tinは金属元素スズの意味: スズの神 → 偶像) という意味があり、“vintage tin jewelry”(由緒あるスズの宝石) ということばがあるように、“jewel” とは関連語で、こうした含意をも持っているのである。3つ目の意味は、「トロフィーとメダルが輝く」という物理的なものである。記事と共に掲載され

ている写真が表す，優勝者ドイツ・チームのトロフィーと選手たちのメダルの輝きにもかけて（図3参照），visual的にも美しくマッチングされている。この意味は，単なる“Germany grabs title”（*The Japan News*, 2014年7月15日）というニュートラルな表現にとどまらない，技巧をこらせて，いくつかの意味を重なり合わせた比喩表現である。ドイツの「優勝」（championship）を受けて，同じ日の新聞に“‘Made in Germany’ brand may be ultimate champion”というドイツ製品紹介の記事が掲載された。“Champion”という語が，異なったコンテキストで，ほぼ同義（「一番」の意味）で使われているのである。



Germany glitters as ‘jewel’ strikes

図3 ドイツが優勝したことを伝える記事

（*The Japan News*, 2014年7月15日）

こうした多義性を用いた，ことば遊びを考察してみると，一見，シンプルに見える見出しにも，時折複雑さが潜んでいることがわかる。英語自体が，こうした重層的表現を可能にし得る言語である（Baba & Sato 2004：iv）ためであろう。このように，見出し等には意味の多義性，比喩表現，そしてユーモアといった詩的機能があることが多い。学習者がその語彙力を増

やし、時事事情に精通し、英語的なユーモア・センスを磨き、想像性をも高めることで、さらに理解は深まっていく。なによりも数をこなすことで、感覚は磨かれていくということを指導し、動機付ける (motivate) ことが大切なのであろう。

なお、本項で扱った多義語やユーモアというものは他の領域においても使用されるものである。例えば、経済関連の分野における一例をあげると、“Budget airlines see turbulence”(格安航空会社は、経営が波乱気味である) (*The Japan Times on Sunday*, 2014年8月17日) で、この“turbulence”は多義語であって、経済上の波乱(経営難)と、物理的意味で、飛行機が体験する乱気流(空気中の揺れを含意する)とを、引喩としてかけている。また、“budget”も「格安」という形容詞的用法と、「予算」という名詞とををかけているのである。

8. 概念メタファーの観点から見た分析

本項では、認知言語学的なフレームワークや用語を導入して、比喩(メタファー)について、論じることとする。なお、この分野に関する知識は、英語の口語表現を始めとした様々な表現を理解する際にも役立つものである。認知言語学の一部の立場では、言語の比喩的用法は、単に文学や文体上の装飾ではなく、私たちの認知の仕方や世界のとらえ方に、深く根差したものであるとみなしている。いわゆる概念メタファー (conceptual metaphor) ないし、認知メタファー (cognitive metaphor) というとらえ方であり、これは、「客観的真実よりは、人間の経験や理解が中心的役割を果たしている」という考えに基づいている(レイコフ&ジョンソン 1986: iv)。概念メタファーは、一見、比喩性が内在していることが、わかりにくいタイプの比喩形式である。逆に比喩性があることが、比較的わかりやすい例として、優勝ゴールを決めたドイツのゲツチェ選手を「ドイツの至宝」と例えたり(第7項(4)参照)、前大会優勝国のスペインを、16世紀後半に当時、世界最強とされたスペインの海上戦力「アルマダ」に例えるという隠喩の諸例がある。⁷

方向づけのメタファー

概念メタファー (conceptual metaphor) とは、「概念同士が関係し合ってひとつの全体的な概念体系を構成している」(レイコフ&ジョンソン

1986 : 18) ものをいう。私たちの思考にある、空間についての概念体系は、上-下 (up-down), 前-後 (front-back), 内-外 (in-out), 中心-周辺 (central-peripheral) といった、日常体験する空間での基本的な方向性によって構成されているものである。こうした空間における方向感覚を、ある概念に結びつける比喩形式のことを、空間関係づけのメタファー (spatialization metaphor) における、方向づけのメタファー (orientational metaphor) と呼んでいる。⁸ 方向づけのメタファーの根本は、上下という物理的感覚である。方向性に関する物理的感覚を、物事の良し悪しの状態と結びつけるのが、方向づけのメタファーの特徴である。英語で “I’m feeling up / down today,” 日本語でも「有頂天」, 「上昇気流」, 逆に「気持ち沈んでいる」, 「下降線である」, 「どん底」というように、「楽しい」や「良い」という感覚は、「上」, 「悲しい」や「悪い」という感覚は「下」と、抽象的に方向づけられるのである。⁹ これらのことにより、以下のことがいえる。

「楽しいは上, 悲しいは下」(HAPPY IS UP; SAD IS DOWN)

「良いは上, 悪いは下」(GOOD IS UP; BAD IS DOWN)

「支配力や力があることは上, 支配されたり服従することは下」
(HAVING CONTROL OR FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL OR FORCE IS DOWN)

(Lakoff & Johnson 1980 : 14-16)

→「あの人の足元にも及ばない」という表現がある。

こうした上下の感覚を、スポーツの対戦に当てはめると、次のことがいえるであろう。

「勝ち上, 負け下」(WIN/VICTORY IS UP; LOSS/DEFEAT IS DOWN)

勝者が、敗者を打ち負かすことは、まさに「下す」ということばに示されるように、「下へ（引きずり）おろす動き」という認知の仕方に基づいている。

色彩語メタファー

最後に、いわゆる色彩語メタファーに伴われる感情メタファーについてであるが、これはある色が、特定の感情やイメージを想起することをいう。

例えば、黒なら喪の色、青なら憂うつといったものである。どの色がどんな感情や状態をイメージするかは、人により、文化により、歴史により様々である。例えば、赤を情熱ととらえる場合もあれば、革命で流された人民の血のイメージでとらえる場合もある。また同じ文化の中でも、色のイメージが固定していない場合もある。青のイメージも、blue ribbon（最優秀の）、blue-blooded（貴族の）と、高貴・優良のイメージがある一方で、a blue Monday（休み明けで憂うつな月曜日）のように、憂うつのイメージもあり、固定していない（田中 & 田中 2008：151-156）。青はサムライ・ブルーのシンボルカラーになっているため、後述するように、“blue”に関する表記も記事に出てくる。本稿の記事では憂うつの意味で使われている。

9. 概念メタファーの事例

以上述べたいいくつかの比喩表現は、見出し、書き出し、本文において、多義性も持たせつつ、以下のように表されている。

(1) Japan crashes in World Cup（見出し）

Cote d'Ivoire rallies to beat Samurai Blue in opening match

（書き出し）

（*The Japan Times*, 2014年6月16日）

日本が初戦で、コートジボワールに逆転負けした時の記事である。本田選手の先制点により、一度は喜びに舞い上がったものの、後半、相手チームのサイド攻撃により、立て続けに2点を失点した。その過程を、いったんは高度を上げた飛行機が、墜落する様子に例えて、“crash”で表している。いわゆる、空間関係づけのメタファー（spatialization metaphor）の中の、方向づけのメタファー（orientational metaphor）の事例である。すなわち、勝つこと（嬉しいこと）は上（up）で、負けること（悲しいこと）は下（down）という、私たちの空間に対する、基本的な把握概念と感情との関係を表す比喩法なのである。なお、書き出しの“Cote d'Ivoire rallies to beat Samurai Blue in opening match”（コートジボワールは反撃して、初戦でサムライ・ブルーを打ち負かした）における“to”は、結果を表す不定詞で、スポーツ記事では、よく使われる語法である。

(2) Soccer loss leaves fans feeling blue

…Having watched Samurai Blue get crushed 4-1 by a rampant Columbia, it was little wonder that blue-clad fans who had been drinking all night opted to have another for the road.

(*The Japan Times*, 2014年6月26日)

見出しの“Soccer loss leaves fans feeling blue”は、「サッカーの敗退によって、サムライ・ブルーのファンたちは憂うつな気分になった」の意味である。わざわざ、“feeling blue”という感情を表す表現が用いられているのは、Samurai Blueのblueにかけているものである。同様に、これと呼応する本文に見られる“blue-clad fans”という表現も、「ブルーのユニフォームを着たファン」という意味と、「憂うつな気分につつまれたファン」という両方の意味を兼ねていると考えられる。これは色彩語メタファーにより、感情を表す比喩用法の一例である。本文からの引用部分は、「サッカーの敗退により落ち込んでしまい、一晩中飲んでいたブルーのユニフォームを着たファンたちは、（悲しみをまぎらわすために）またさらに、飲んだということは、それほど驚くようなことではない」という意味である。

次は、Group Aにおける、クロアチア対カメルーンの試合結果を伝える記事の、見出しである。

(3) Mandzukic hits double, Croatia sinks Cameroon

(*The Japan News*, 2014年6月20日)

字義通りの意味は、「マンジュキッチ選手が、2ゴールを決めて、カメルーンを撃沈した（下した）」であるが、ここでは、スポーツの戦いを、実際の海戦（a naval battle）に例えている。“Hit”には、シュートして決めるという意味の他に、「銃弾が標的に命中する」という実際の戦いに関する用法とがある。よって、「マンジュキッチ選手が、2発を命中させ、敵艦を沈めた」という海戦の図式を、隠喩としてほうふつとさせているのである。前述した「勝つことは上（up）で、負けることは下（down）」という方向づけのメタファーを推し進めたもので、勝者が敗者を「下す、沈める」というように、下方向へ向かわせる、方向づけのメタファーに基づいている。

(4) Opportunity for greatness at Messi's feet

(The Japan News, 2014年7月13日)

Opportunity for greatness [is] at Messi's feetと、見出しにおいて、「be 動詞のis」が省略されている。ドイツとの決勝戦を、直後に控えたメッシ選手についての記事の見出しである。“At one's feet”は成句であり、このコンテキストにおいて、“right before one,” “just waiting in front of you to be grasped”という意味、すなわち「～のすぐ目の前で、その機会を待ち構えている」というニュアンスで使われている。よってフレーズは、「さあ、今こそメッシ選手の偉大さを発揮する好機である」、及び、「その偉大さ発揮のチャンスは、メッシ選手（による一蹴り）にかかっている」という含意を持っているのである。何よりも、このfeetは、有名な「メッシの足」からの引喩であり、具体性と抽象性を持った多義語として、機能している。概念メタファーの観点から見ると、“at one's feet”は、「下にある」という方向づけのメタファーの事例である。“Opportunity for greatness”(偉大さ発揮のチャンス)を、1つの存在物 (entity), すなわち物 (object) と、抽象名詞で比喩的にとらえ、¹⁰ それでさえ、メッシの足元にあるという選手の力をたたえた言い方にもなっている。この見出しは、“at one's feet”が示す成句的意味と、それがかもしだす物理的・抽象的イメージ、そして根底にある方向付けのメタファーと、短い中にも様々な要素を盛り込んだ、ユーモアと次戦への期待にあふれる見出しとなっている。

これまで見てきた概念メタファーに基づく語法の知識は、他の領域における英語の理解にも役立つものである。例えば、経済関連の分野でもよく見受けられる。例として、第2項(11)で示した“Exports down 5 % in July”(輸出額が7月に5%減少した)も、「下へ→減少」という方向づけのメタファーに基づいたものである。(逆に「輸出額増加」という意味は“up”で表される。) 同様に、“boosting profit margins”(利幅を押し上げる) (The Japan Times on Sunday, 2014年8月17日) の“boost”も、「下から上へ押し上げる」という方向づけのメタファーの一例である。また、TPPの日米二国間交渉に関する見出し、“Japan, U.S. OK 9 % floor on beef tariff”(日本とアメリカは、牛肉に9%以上の関税をかけることで折り合った) (The Japan News, 2014年4月21日)¹¹ における“floor”は、上下の尺度で、床を比喩的・抽象的に「最低のレベル」とみなし、「それ以上」という意味で使われている。日常会話表現においても、“He is far above the rest in his

class,” “Okinawa suffers harshly under the boot heels of the army” と概念メタファーにおける方向づけのメタファーに基づいた用法は多い。概念メタファーは、私たちの思考に、無意識にも浸透していて、それに基づいて私たちは日常的に言語化をしているためである。

10. 結論

本稿では、サッカー・ワールド・カップ（FIFA World Cup 2014）の記事を主として扱いながら、英字新聞におけるレジスター（言語使用域 register）すなわち、そのジャンル独特の語彙、語法、言いまわし、構文、文法、押韻、多義語、ユーモア、比喩表現等について紹介した。受講生にも馴染みのある記事を中心に扱ったので、背景知識がある為、比較的入りやすかったようである。語彙や文体は、サッカーの記事特有のものも多い。このことは他の分野、例えば、経済、政治、社会、アートに関する記事には、それぞれに固有の語彙や文体が使われるのと、同様である。但し一方で、どの分野にも共通して、使用頻度の高い語法や文体やユーモア、すなわち、新聞英語の領域、一般に通じる語法や文体も多いのである。例えば、ことば遊びといった詩的特性は、読み手の注意を引き付けるために、短いながらも、新聞の見出しには偏在していることが観察される。

英字新聞の1つの学習プロセスとして、まずは、ある領域（学習者の関心の高い分野で良い）の記事を、導入の分野として始めながら、繰り返し読んで語彙力を増強し、その文体に精通してくると、他の領域にも入っていきやすくなる。例えば、本稿で扱った多義語やユーモア、また概念メタファー（人の認知の仕方が比喩的に言語化されているもの）に基づいた語法であるが、それらの知識は他の領域を理解する際にも応用できるのである。例えば、前述のように、経済関連の表現においても、また口語表現等においても、方向づけのメタファー（概念メタファー）に基づいた用法はよく使われている。概念メタファーは、私たちの思考に深く浸透しているものであって、そこから導き出されるモデルやフレームワークに基づいて、私たちは日々思考し、言語活動を行っているためである。また、特に喜怒哀楽が強い局面であるとか、大きな節目（スポーツにおける苦戦の末の勝敗）において、比喩性の高い表現や、強度を示す表現の使用頻度が、高まる傾向にあるようだ。このことは、ある物事に対する経験の印象が強いと、通常の言い方では飽き足らぬ表現への要求が、人には根源的にあるためと

考えられる。ドイツ優勝の記事では, “glitter,” “jewel” 等を多義語として比喩表現をも用い, 優勝者にふさわしいトロフィーとメダルの輝き (図3参照) というvisual面 (写真) と言語面とを, 見事に調和させていた。英字新聞では, 様々な分野やテーマにおける語彙・語法や文体上の技法を, 時に写真等, visual上の工夫も取り合わせて, 総合的に学ぶことができる。英字新聞は, 時事問題にcatch up しながら, 口語英語も含めて英語学習ができる総合性を持つ教材なのである。これは, comprehensionにおいても, インタビュー作成等を通したproductionにおいてもあてはまる (第6項参照)。この論文にて提示したサッカー英文記事を主とした, 様々な観点からの分析が, 英字新聞における他の様々な領域や, 口語表現等を学び理解する上での, 橋渡しになればと願う。

注

- 1 *Newsweek*のonline site, <<http://www.newsweek.com/americans-want-treat-migrant-children-refugees-poll-says-261995>> より一部編集して引用。(閲覧日: 2014年9月1日)。
- 2 Double Dutch (ダブル・ダッチ) とは, 2人の回し手が2本の縄を交互に内側に回し, その中をジャンパーたちが跳ぶ縄跳びのことである。
- 3 *The Wall Street Journal*のonline site, <<http://online.wsj.com/articles/spains-reign-comes-to-bitter-end-1403130231>> より引用。(閲覧日: 2014年9月1日)。
- 4 批評的談話分析 (Critical Discourse Analysis; CDA) 等で, 唱道されるように, 特に政治関連の記事では, 指導者, 役職者, その他参与者や, 出来事そのものを表記するための言い方等, その表現の微妙な相違が, 政治的立場や思想の違いを含有していて, それがディスコース全体の流れに影響を与えうることもある (Wang 1993)。
- 5 *The Daily Yomiuri*は, 2013年4月に, *The Japan News*に改名された。
- 6 評価語彙研究であるアプレイザル研究 (Appraisal Theory) における, 主として「感情に基づく反応を表す語彙 (Affect)」である (Martin & White 2005)。
- 7 Lakoff & Johnson (1980: 14) が, 構造のメタファー (structural metaphors) と呼んでいるものの事例である。すなわち, ある概念が他の概念に基づいて, 比喩 (メタファー) によって, 構造化されているという比喩形式である。
- 8 空間関係づけのメタファーの別のタイプとして, 存在物 (entity) や内容物 (substance) と, 私たちの概念とを関連させる存在のメタファー (ontological metaphor) というものがある。これは別稿のテーマとする。
- 9 これらは一般的にいえることであり, 中には, 「A国とB国との対立のステージが上

- がった」というように、上への動きが否定的なことに結び付けられる場合もある。
- 10 いわゆるLakoff & Johnson (1980: chapter 6) のいう存在のメタファー (ontological metaphor) の一例である。
 - 11 この「9%で合意」という数字は、そもそも努力目標として掲げられた数字であったが、合意された数字として掲載された。そのため、政府関係者から誤報と指摘され、後に修正されている(「GoHOO マスコミ誤報検証サイト」<<http://gohoo.org/alerts/140423/>> より)。(閲覧日: 2014年9月1日)。The Japan News の4月21日版における“Japan and the United States have agreed…”という表現は、25日版では、次のような後退した言い方で掲載されている。“Tokyo and Washington were said to have been negotiating over a gradual decrease of Japan’s beef tariffs to a level of ‘9 percent or more,’ from the current 38.5 percent.”

参考文献

- Baba, A. & Sato, K. 2004. *2004/2005 Current English*. Seibido.
- Empson, W. 1955. *Seven Types of Ambiguity*. New York: Meridian Books.
- 池上嘉彦. 1987. 『意味論・文体論』大修館書店.
- 池上嘉彦 (編). 2003. 『英語の意味』大修館書店.
- Jacobson, R. 1960. Closing Statement: Linguistics and Poetics. In T. Sebeok (Ed.), *Style in Language*. 350-377. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kamimoto, T. 2010. *How to Read Newspaper Headlines*. Asahi Press.
- Kizuka, H. & Gagne, W. 2002. *News Express 2002: International Current Affairs*. Macmillan Languagehouse.
- 国際英語プロジェクト. 2002. 「『新聞英語』のすすめ: 『時事英語』の授業実践への試案」『京都文教研究紀要』7: 81-86. 京都文教女子中学・高等学校.
- Lakoff, G. & Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- レイコフ, G. & ジョンソン, M. 1986. 『レトリックと人生』(渡部昇一, 楠瀬淳三, 下谷和幸 訳) 大修館書店.
- Martin, J. & White, P. 2005. *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. London and New York: Palgrave Macmillan.
- 文部科学省. 1999. 『専門教育に関する各教科 英語』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320212.htm (閲覧日: 2014年8月17日).
- 田中晴美 & 田中幸子 (編著). 2008. 『社会言語学への招待: 社会・文化・コミュニケーション』ミネルヴァ書房.
- Wales, K. 1989. *A Dictionary of Stylistics*. London: Longman.
- Wang, S. 1993. *The New York Times' and Renmin Ribao's news coverage of the*

1991 Soviet coup: A case study of international news discourse.

Text, 4: 559-598.